

令和 2 年度 九州地域国際化協会連絡協議会
「災害時に外国人支援に従事する関係者向けの研修・訓練事業」実施報告

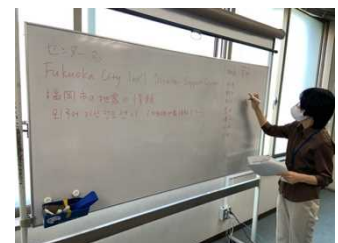
ブロック	九州ブロック	幹事団体	公益財団法人福岡よかトピア国際交流財団
開催日時	2020年10月23日(金) 10:00～17:00		
研修のねらい・目的	<p>・災害多言語支援センターでの活動を実際に行ってみるにより、災害時における外国人住民支援を円滑に行うために必要な事前準備事項を明らかにし、今後の災害に備える。</p> <p>・体制づくりや準備すべき事項は、たくさんあるが今回の研修では下記の事項を明らかにする。</p> <p>①実地研修を通して災害時の外国人支援のイメージを明確にする。</p> <p>②イメージを明確にしたうえで、地域国際化協会としての課題、広域連携の課題を探る。</p> <p>③新型コロナ禍における支援活動のあり方を探る。</p>		
想定災害	「福岡市」で発生した「地震災害」で被災した外国人住民への支援活動を行う		
会場・場所	福岡市国際交流会館 第1会議室、第2会議室、ZOOM 併用		
参加者	地域国際化協会九州ブロック構成団体、九州地域の地方自治体 35名		
研修内容 (概要)	<p>○九州ブロックはオンラインとオフラインの同時進行で行なった。</p> <p>○オフラインは幹事団体をはじめとする関係団体（福岡よかトピア国際交流財団、福岡市、福岡県国際交流協会、福岡県庁）とし、その他は Zoom での参加とし全団体が応援団体として参加した。</p> <p>○講義、研修説明の部分まで音声の設定に誤りがありオンライン団体は声が聞きづらい状態だったが終盤、設定が正しくされ聞きづらさは解消された。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. <主催挨拶> (一財) 自治体国際化協会 多文化共生部長 清水 隆教 2. <自己紹介> 研修参加者による自己紹介 3. <講義> 災害時外国人支援で、だれがどういう役割を意識するか CLAIR 災害時外国人支援アドバイザー 清水 由美子 氏 4. <多言語支援センター設置・運営訓練> 多言語支援センター設置・訓練の進め方 CLAIR 災害時外国人支援アドバイザー 高木 和彦 氏 5. 休憩 6. <災害多言語支援センター開設準備および関係団体への伝達> (1) センター開設にあたっての協議 (2) 災害多言語支援センター開設準備 7. <災害多言語支援センター開設・運営> 総務班、情報班にわかれて作業を進める。また応援団体に対し遠隔応援を依頼する。 8. <外国人支援体験：相談対応> ZOOM を使った外国人相談対応 ※被災地（福岡国際交流会館）に外国人被災者が相談来所と想定。 ※応援団体（九州ブロック構成団体）に通訳依頼を行い、Zoom で相談対応を行う。 9. <ふりかえり> 参加者間の情報共有 10. <閉会の挨拶> (公財) 福岡よかトピア国際交流財団 専務理事 井上 るみ 氏 		

研修内容
(詳細)

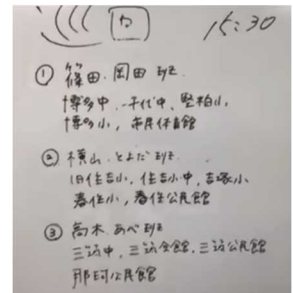
1. <主催挨拶> (一財)自治体国際化協会 多文化共生部長 清水 隆教
 - 本研修は年度からオンラインを併用しながら全国的に展開。
 - 令和2年7月豪雨が発生し、全国的に多く発生するようになった。
 - 外国人が弱者とならないよう、一層の連携と支援体制が必要。
 - 新型コロナウイルス感染症を考慮した支援体制などが必要。
 - 実際の有事を想定し迅速に動けるよう去年から全国6ブロックで開催。
2. <自己紹介> 研修参加者による自己紹介
3. <講義> 災害時外国人支援で、だれがどういう役割を意識するか
CLAIR 災害時外国人支援アドバイザー 清水 由美子 氏
 - 災害時は何が起きるかわからない。準備してあること、していることが思い通りに動かないのが災害。家が崩れ道路が塞がれる。
 - 冷静に考えれば普段は分かるが、災害時は正常に考えられない。
 - 被災地に「何が必要か」と聞かれても何が必要で、何をしたいのかが出てこない。
 - 支援センターを立ち上げた経緯と創設体制の状況
 - 顔の見える人とのつながりが体制とメンタルの力になった。
 - 外部から入る団体や人は様々。心が傷つき泣いたこともある。
 - 被災時に誰がどういう役割を意識するのか、平時から考える必要がある。
 - 顔が見える関係性が大事。
 - 情報は届けるためではなく、相手を安心させるために届ける。
4. <多言語支援センター設置・運営訓練> 多言語支援センター設置・訓練の進め方
CLAIR 災害時外国人支援アドバイザー 高木 和彦 氏
 - 研修会の概要、流れの説明。
 - 想定災害や対応、スケジュールの共有。
 - コロナ禍の広域連携について考えるきっかけにする。それぞれが想像し話し合いながら進める。
5. 休憩
6. <災害多言語支援センター開設準備および関係団体への伝達>
 - (1) センター開設にあたっての協議
 - (2) 災害多言語支援センター開設準備
7. <災害多言語支援センター開設・運営>

総務班、情報班にわかれて作業を進める。また応援団体に対し遠隔応援を依頼する。

 - 総務班
 - ・電話で災害本部を作った旨通知。
 - ・地域国際化協会へメールで応援の依頼。
 - ・翻訳の支援と相談対応の支援の返事ありをもとに情報の集約。
 - ・福岡市57地区で避難している情報あり。



- ・地図に情報を落とし込む作業。
- ・巡回班の班編成を行い、15時半～巡回を設定。
- ・博多区から3班体制で巡回するルートを確認。



○情報班

- ・財団 + 福岡県庁のメンバー混合の班編成
- ・名前の確認をし、言語の確認を行う。
- ・翻訳に取り掛かる前にセンターの多言語の名称を確認。
- ・随時福岡市から発出・受信される情報を割り振って翻訳作業。
- ・情報の優先順位を決めるため仕分け作業を行っていたが、はっきりなしに情報がくる。
- ・情報を持って行けるように3つの分類に情報を分けた。
- ・その他の生活情報のまとめをする。
- ・災害情報の翻訳を他の協会に依頼。

8. <外国人支援体験：相談対応> ZOOM を使った外国人相談対応

※被災地（福岡国際交流会館）に外国人被災者が相談来所と想定。

※応援団体（九州ブロック構成団体）に通訳依頼を行い、Zoom で相談対応を行う。

○1 人目 イギリス人の相談

相談内容：避難所はどこか、避難上はどんなところか、国の両親に電話したい、iPhoneを亡くした。

対応団体：宮崎県国際交流協会

○2 人目：韓国人の相談

相談内容：糖尿病で薬が欲しい。医療保険をなくした。

対応団体：おおいた国際交流プラザ



9. <ふりかえり> 参加者間の情報共有（抜粋）

○（公財）佐賀県国際交流協会

- ・災害時に使えるツールを全員が共有できる google フォルダを入れておく。
- ・翻訳依頼は地名にルビを
- ・幹事団体が被災したら副幹事団体へ連絡？

○長崎県国際交流協会

- ・協定書の中に副幹事団体の役割があることに気づいた。

○熊本県国際協会

- ・Zoom の操作がうまくいかなかった。
- ・支援側にも準備が必要ということに気づいた。

○（一財）熊本市国際交流振興事業団

- ・依頼する時に依頼する団体は依頼先に会社名、地名、人の名前なルビを。
- ・マニュアルの改訂時期などで外部との連携について再考したい。

○おおいた国際交流プラザ

- ・センターの設置において、することが何で、どうするのが勉強になった。
- ・顔の見える関係が大事と再認識。つながりを見つけない。

○（公財）宮崎県国際交流協会

- ・災害時支援センターの設置の流れがわかった。
- ・キーパーソンのつながりや体制づくりを今後頑張りたい。
- ・市町村との連携などを考えた 1 日だった。
- （公財）鹿児島県国際交流協会
 - ・協会職員が 2 人しか参加していない。県や市町村を巻き込めなかった。
 - ・訓練されている状況を見て、立ち上げは協会だけでは難しいと感じた。
 - ・市町村や関係団体の巻き込みが大事と思った
- （公財）沖縄県国際交流・人材育成財団
 - ・相談の対応で病状や症状などの情報の聞き取りが難しいと感じた。
- 福岡県庁
 - ・出来る事と出来ないことがわかった
 - ・多言語支援センターとはどんなものかというイメージはもてた
- 清水アドバイザー
 - ・今日の訓練、よくやったと褒めたい。
 - ・何度も災害を経験している人も少ない。
 - ・若い人は昔の災害を知らないが、どの時代にもプロ意識があるかどうか。臨時職員なのかベテランなのかは関係ない。困っていると相談する人は会った人に話をする。だと思います。かもしれません、など曖昧な情報は口から出さない。自分の役割は何なのか。どの言葉で伝えたらいいのか。その方法はいっぱい持っていたほうがいい。
- 高木アドバイザー
 - ・今回現地は集合、その他の団体は Zoom。オンラインでできることできないことが分かったと思う。オンラインでも一定の活動はできるが準備をしっかりとっていく必要がある。



現場とオンラインを繋いでのふりかえりの様子。

- ◆ 最後に佐賀県国際交流協会からスプレッドシートの紹介を行った。今後は九州ブロックで共有することで迅速に情報の共有などが出来るといいと思っている。

10. <閉会の挨拶>（公財）福岡よかトピア国際交流財団 専務理事 井上 るみ 氏
- ・午前中の講義では清水アドバイザーから災害時は何があるかわからないという言葉通り、訓練中でも何が起こるかわからないことを体験した。
 - ・また、高木アドバイザーからは今日はいっぱい失敗してくださいとあったように、たくさん失敗をし学びが大きかったと思いました。来年も引き続き訓練をし、継続して取り組んでいきたい。今後とも災害時のみならず平時でも連携していくことをお願いしたい。